

# 『當麻畧傳』(延宝五年写) について

## — 解説並びに翻刻 —

稲垣泰一

### 〔解説〕

一

架蔵の『當麻畧傳』(延宝五年(一六七七)写本)一冊について、簡単な解説とともに、翻刻を付して紹介することとする。

まず、書誌を記しておく。

江戸初期、延宝五年(一六七七)夏七日の書写本一冊。料紙は楮紙。縦二十二・八糎、横十六・八糎。表紙・裏表紙とも本文共紙。袋綴。仮綴。全二十三丁(表紙・裏表紙を含む)。外題は表紙表(一丁オ)左脇上に打付け書きで、「當麻畧傳」と大きく墨書。内題はなし。表紙裏(一丁ウ)に題目を三項目記す。墨付本文は全二十一丁。本文は每半葉九行。端正な筆跡の漢字片仮名交り文(訓読文)。少々虫損がある。

なお、奥書(二十二丁オ)があり、「于時延寶第五丁巳曆季夏七日寫之」と記す。その後、「法、元録八年、法然源空上人、勅號、大師諡成、一夢」(二十二丁ウ)、「卅拾一ヶ寺、此方六ヶ寺、多分」(二十三丁オ)などの墨書(手習い、落書)が見られる。したがって、本書は延宝五年(一六七七)夏(四月)七日に書写されたもので、その後元禄八年(一六九五)頃、浄土宗、または浄土真宗関連の者の所持本であったと推定される。

二

次に、本書の構成とその内容について簡略に記しておく。本書は表紙裏(一丁ウ)に題目があり、「第一彼岸記」「第二見聞隨身鈔拔書」、「第三當麻寺畧縁起」の三項目を記す。

まず、「第一彼岸記」は二丁オ一行目く六丁オ三行目ま

でに相当する。『彼岸記』は浄土真宗の僧存覚の撰述に擬せられる書物である。竜樹（ナガールジュナ、一五〇年～二五〇年頃のインドの僧で、初期大乘仏教を確立した人物。『大智度論』『十住毘婆沙論』の著者とされる）著作とされる偽書である『天正記』に拠って、春秋二季の彼岸の由来を述べるとともに、二季の彼岸には、諸天が夜摩天と兜率天の間にある中陽院に集まって、人間の善悪の行為を記録するので、悪行をとどめ、善行につとめ、浄土往生を願うよう勧めている。存覚は鎌倉後期、南北朝時代の浄土真宗の僧で、正応三年（一二九〇）～応安六年（文中二年）（一三七三）の人。本願寺三世の覚如の長男で、越前、尾張などで教化にたずさわったが、父覚如とは義絶、和解を繰り返して、八十四歳で入寂した。『彼岸記』は真宗仮名法語六、真宗聖教大全、真宗大系などに載るが未見。

次に、「第二見聞隨身鈔拔書」は六丁オ四行目十二丁ウ九行目までに相当する。本文では、「見聞隨身鈔卷上」とあり、「第一彼岸本説事」、「第二正五九月之事」、「第三六齊日十齊日等之事」、「第四出家功德之事」の四項に分けて記述する。『見聞隨身鈔』は三巻で、日蓮宗の僧、日遠の撰述。日遠は元龜三年（一五七二）～寛永十九年（一六四二）の人で、字は堯順、心性院と号した。本満寺

日重に従って出家し、慶長九年（一六〇四）甲斐身延山久遠寺第二十二世となる。その後、武蔵池上本門寺を徳川秀忠より賜り、住持となる。七十一歳で入寂。『見聞隨身鈔』は寛永十六年、同二十年、慶安三年の版本があるが未見。

この第二項目の内容は、「第一彼岸本説事」では、善住陀羅尼經、竜樹菩薩天正驗記、仏説彼岸功德成就經、速出生死到彼岸經、智論、時極間經文句を引用して、春秋二季の彼岸の意義、功德、由来などを説く。「第二正五九月之事」では、智論、金剛童子軌意を引用して、正月、五月、九月に悪行をとどめ、善行を修するようにと説く。「第三六齊日十齊日等之事」では、齊法陀羅尼經、太賢古迹、智論十三、大乘義章、業報差別經、〈五〉縁經、帝釈善集經を引用して、「六齊十齊八王齊六合齊」などの齋日に齋戒、勤行して善行をするよう勧める。また、五辛食、肉食、鳥食、魚食、酒飲、婬欲などをとどめ、犯さぬようにと説く。「第四出家功德之事」では、出家功德經、花手經、賢愚經、大悲經を引用して、出家の功德について説き、最後に「又像法決疑經八十二アリト云々」と結んでい

引き続き、「第三當麻寺畧縁起」は十三丁オ一行目から二十二丁オ二行目までに相当する。この部分は本文には題目が記されておらず、直接「抑奈良ノ帝之時」の文から始まる。この項目の内実は、奈良県葛城市の当麻寺に伝わる国宝・綴織「当麻曼荼羅」（観経変相図）の制作由来について記す縁起の略記である。その内容は、聖武天皇の頃、横佩の右大臣（藤原豊成）の娘（中将姫）が発心して、当麻寺で出家し法如と号した。そして、姫（法如）は阿弥陀如来の化身である化尼のお告げにより、蓮茎を調達し、五色の蓮糸に染めあげる。観音の化身である織姫が現れ、五色の蓮糸を用いて大幅の曼陀羅を織り、竹軸に掲げる。そして十三年後、姫（法如）は西方極楽浄土に往生したというものである。

この「当麻曼荼羅」の制作由来を説く説話記事は、鎌倉時代、『建久御巡礼記』（『南都巡礼記』、『当麻寺流記』（九条家本）、国宝の絵巻『当麻曼荼羅縁起』（光明寺蔵）、『諸寺縁起集』（護国寺本）、『大和国当麻寺縁起』（仁和寺本）、『古今著聞集』巻一第三、『私聚百因縁集』巻七第四、『和州当麻寺極楽曼陀羅縁起』（禅林寺本）、また『元亨釈書』巻二十八などに小異を含みながら記されている。そ

の後、室町時代に入ると、『三国伝記』巻十一第二十七に見られる「継子いじめ」「捨子物語」の要素を含んだ中将姫説話（いわゆる雲雀山系説話）が形成されて、縁起絵巻（詞書を含む）、掛幅絵などに描かれたり、お伽草子（室町時代物語）や、往生譚として仏教説話集、説経談義書、説経注釈書類に取り上げられたり、更には、能、狂言、説経浄瑠璃、古浄瑠璃にも脚色されて幅広く展開する。江戸時代に至ると、この中将姫説話、物語は更に増幅して人口に膾炙して行く。

次に、この『當麻寺畧縁起』の梗概を以下に記す。

- ① 奈良の帝（聖武天皇）の時、横佩の右大臣（藤原豊成）という人がいた。その娘を中将姫という。
- ② 姫が三歳の時、母親が重病を患った。
- ③ 母親は大臣との固い契りもむなしく思い、極楽往生を願って他界する。
- ④ 大臣は悲しみのあまり、一首の和歌を詠ずる。
- ⑤ 姫が七歳の時、ある夫婦が男女の子供を連れて花見をしているのを見て、姫は乳母に母親のいないことを嘆く。
- ⑥ 父大臣は継母を姫に会わせる。姫は継母を慕う。
- ⑦ 姫は称讃浄土経を読誦して、母親の菩提を弔う。
- ⑧ 姫が十一歳の時、その美貌が評判となり、後の候

- 補となる。
- ⑨ 継母は嫉妬し、男を姫の所に通わせて、姫の乱行を讒言する。
- ⑩ 大臣は家の恥辱として、家来の武士に姫を宇多郡日張山に連れ出して、斬殺しよう命じる。
- ⑪ 姫は小経を父、母、己れのために誦誦し、極楽往生を願って念仏する。
- ⑫ 武士は姫の行いと姿の美しさに感動し、姫を殺さず、妻を呼んで庵を結び、姫をかくまうて養った。
- ⑬ 姫が十四歳の時、武士は重病にかかって歿する。姫は料紙を求め得て、称讚浄土経一千巻を書写する。
- ⑭ 姫が十五歳の時、父大臣が日張山に狩猟のために訪れ、姫と出会う。
- ⑮ 大臣は継母の讒言を知り、継母と離別する。
- ⑯ 姫が十六歳の時、姫は后妃の候補となるが、姫は断念し、父母の報恩のために出家を決意して、大臣と面会の後に別れる。
- ⑰ 姫は当麻寺を訪れ、僧に出家を願い出て剃髪、戒名法如比丘尼と号した。姫十七歳の時である。
- ⑱ 姫は生身の阿弥陀如来にまみえることを誓願して籠る。

- ⑲ 天平宝字七年六月十六日のこと、一人の禅尼(化尼)が現れ、蓮茎百駄を用意しよう告げる。
- ⑳ 姫(法如)は大臣に頼み、蓮茎九十九駄を寺に運び入れる。
- ㉑ 寺の北に池を掘り、蓮糸を五色に染めあげる。その池を染野の池という。
- ㉒ 六月二十二日の酉の刻に、一人の女人が現れ、油と麩を求め。それを用いて灯とし、寺の乾(西北)に機を立て、横一丈五尺、竪九尺の曼陀羅を織りあげた。
- ㉓ 化尼の持ってきた一節竹を軸としてこの曼陀羅を掲げ、女人は西方に飛び去る。
- ㉔ 化尼は姫(法如)に曼陀羅の意味を説く。姫(法如)は歓喜して一首の和歌を詠む。
- ㉕ 化尼は帰還を告げ、一首の和歌を詠む。
- ㉖ 化尼は自分は阿弥陀如来、織姫は観音の化身であると告げる。そして四句の偈(本文)を説き、十三年後に西方極楽浄土に迎えに来ると告げて去った。
- ㉗ 姫(法如)は光仁天皇宝龜六年春三月十四日に、往生の素懐を遂げる。
- 以上、大変長くなったが、本項目の梗概を①〜㉗にまとめた。

この梗概の内容を、本書成立（延宝五年（一六七七））以前の文献資料と比較すると、西誉聖聡著『当麻曼陀羅疏』四十八卷（永享八年（一四三二））、『浄土宗全書』卷十三（所収）があるが、これはさまざまの要素を広く取り込んで集成したものであり、本項目の『當麻寺畧縁起』とは大分隔たりがある。袋中良定著『当麻曼陀羅白記』<sup>3</sup>（『当曼白記』、慶長十九年（一六一四））はやや近い内容である。特に、姫の弟の誕生や、継母によって姉弟ともに葛城山の地獄谷に遺棄される要素がないことなど、共通する。しかし、姫の当麻寺での出家後の展開では、異なる部分、要素が欠けている部分など多々あり、直接的関係は認められない。

最も近い関係にあるのは、『中将姫』絵巻二卷（山上嘉久氏蔵、『室町時代物語大成』第九卷所収）、『中将姫本地』一冊（二冊）（慶安四年（一六五二）刊、『室町時代物語集』第四、『室町時代物語大成』第九卷所収）、『中しやうひめ』奈良絵本二冊（広島大学国文学研究室蔵、『室町時代物語集』第四所収）などである。これらは全て中将姫説話を年代記的に叙述する。また、本項目の要素①～⑭<sup>27</sup>とも殆どが一致（それぞれ、部分的には文言が小異するところはある）している。ただし、四者それぞれが、姫の年齢、事件の年月日、数量、和歌、偈文の文体などで

異同や有無があり、親子関係ほどの近似はない。ただ、『日張山』『ひはり山』の所在を、本項目と山上本が「宇多郡」「うたのこほり」として、一致している点は注目される。また、これら三書が全て平仮名文体であるのに対して、本項目の『當麻寺畧縁起』は漢字片仮名交り文（訓読文体）である。つまり、その内容、文体、文言などから、本項目はこれら三書の共通母体的祖本との関連があるとも考えられる。特に、後半の和歌の有無などの要素を含めて、この『當麻寺畧縁起』の依拠本（親本）は、これが略縁記であることを踏まえると、かなり整備した内容を有する当麻寺縁起（当麻曼茶羅縁起）であったと推定される。その意味で、本項目の『當麻寺畧縁起』は相応の資料的価値があるものといつてよからう。

#### 四

以上、本書『當麻畧傳』の構成とその内容について、題目に従って、第一項目から第三項目まで見てきた。第一項目では、『彼岸記』を抄出して、彼岸の由来と意義、善行の勧めなどを説き、第二項目では、『見聞隨身鈔』を抜書して、卷上から彼岸の本説のこと、正五九月に特に善行すべきこと、六斎日、八斎日などの斎日のこと、更

に出家の功德などを説いている。最後の第三項目の『當麻寺畧縁起』では「當麻曼荼羅」制作の由来と中将姫の極樂往生を説いて、浄土往生を願うべきことを勧めている。

右のような内容から推して、本書は春秋二季の彼岸会の時節に、その意味や意義、善行の勧めなどを説き、最後に浄土往生の例証としての中将姫の極樂往生譚を説く説経（説法）の用材の覚え書き（手控え書）として、各項目を略記し、『當麻畧傳』と名付けて書写、形成されたものと考えられる。

(注)

(1) なお、法然は元禄十年（一六九七）、東山天皇より「円光大師」の諡号を下賜されている。この墨書はこの事と関連があるか。

(2) 中将姫説話、物語の記載文献資料やその展開と様相などについては、

(イ)『中将姫説話の調査研究報告書』（元興寺文化財研究所、昭和五十八年〈一九八三〉三月刊）

(ロ)徳田和夫著『お伽草子研究』（三弥井書店、昭和六十三年〈一九八八〉十二月刊）

(3)

(ハ)河中一學著『當麻寺私注記』（雄山閣出版、平成十一年〈一九九九〉十月刊）

(ニ)日冲敦子著『當麻曼荼羅と中将姫』（勉誠出版、平成二十四年〈二〇一二〉三月刊）

などに詳述されている。

注(2)の(イ)に所収。

(4)

これら三書の関係、比較は、注(2)の(イ)の第三章「中将姫説話と文学」の項で検討されている。

【翻刻】

凡例

- 一、本文（漢字片仮名交り）、及び送り仮名（片仮名）はすべて原文通りとした。
- 一、字体は通行字体を基本とし、略字、俗字もそれに改めた。常用漢字にあるものはそれに改めた。  
亼↓事 宀↓摩 廳↓庁 龍↓竜
- 一、読解の便を考えて、適宜読点（、）を施した。
- 一、右脇、左脇に付せられた注記は、そのまま原文通り小字で示した。
- 一、補入符号（○）のある部分は、小カッコ（ ）内に入れて補入した。
- 一、虫損、破損などで判読しにくい部分は、山カッコ（ 〰 ）内に入れて示した。

一、見せ消ち符号（○）がある部分は、そのまま残した。ただし、一か所四角□でくくった。

一、送り仮名の片仮名部分で、合字、略字、その他は次の通りとした。

（イ） ㇇↓コト      ヌ↓シテ      ㇇↓トモ

（ロ） 云フ（イフ） 玉フ（タマフ） 下フ（タマフ） 上ル（タテマツル）

也（ナリ） 迄（マデ）

などは漢字のままとした。

一、訓点符号である一・二、上・中・下、レ点はそのまま示した。

一、音号（―中央）、訓号（―左側）はそのまま示した。

一、不審な部分は右傍に（ママ）とした。

一、丁替わり、表・裏は、丁数、オ・ウの順で、毎半葉ごとに、「（二オ）」、「（二十ウ）」のように示した。

一、本書原文では、「齋日」の「齋（齋）」字をすべて「齊（齊）」字を用いている。本翻刻では、すべて「齊」字のままとした。



当麻略伝 (外題 左脇上)

「(表紙表一才)

第一、彼岸記

第二、見聞隨身鈔拔書

第三、当麻寺略縁起

「(表紙裏一ウ)

竜樹菩薩ノ天正記ニ、彼岸経ト四天王経ト両説ヲ以テ記シタマフ、マツ春ノ彼岸ハ華ノ頃ヲ以テ日ヲ定ム、其所ハ、欲界六天ノ中ノ夜摩天ト兜率天トノ中門ニ、一ツノ雲閣アリ、中陽院ト名、此ニ、五百里ニハヒコル大キナル樹アリ、天正樹トイフ、此花ヲ宴トシテ彼岸ノ行ル木ニテ、ナンデ彼岸ヲハ天正トモ名、彼岸トイフハ、此土ノ衆生善ヲ修スレハ、浄土ノ(ニ才)彼岸ニ至ル故也、又時正トイフハ、コノ時夜昼ノ時分正等ナルカ故也、毎年二八月七箇日ノ間、摩醯首羅大自在天上首トシテ、三界ノ諸天、人中、天上ノ冥官冥衆悉、天正樹ノ本ニ衆会シテ、八神ニ勅シテ三卷ノ勘帳ヲツク、衆生ノ善悪ヲ定ム、二八月

ノ彼岸ノ日不定ナルハ、年ニヨリ花ノ盛リ不同ナル故也、此花ノカ人間ノ生年、生モノ、カスト同キナ  
リ、(二ウ) ヨテ、善ヲ作人ニ当リタル花ハ、アサヤカニ匂コトニ殊勝ナリ、悪ヲツクルモノニ当ル花  
ハ、色ケカレクサクニホフナリ、此花ヨリ、衆生ヲ正シテ名字ヲ書付、善根ヲハ宝札ト、テ金ノ札ニツ  
ケ、悪ヲハ鉄ノ札ニカキ、无記ノ衆生ヲハ非宝非縛印トテ、金鉄和合ノ札ニカクナリ、善悪无記ノ三種  
ノ人、此札ニノラスト云事ナシ、又コレニカキツケラレタル記ヲハ、三種ノ正(三才)印トテ、ヨキ  
札ハ帝釈ノアツカリニテ、天上ノ善法堂ニオサム、悪ノ札ヲハ閻魔王ノ預ニテ、光明院トテ、炎魔片ノ  
九面ノ業ノ鏡ニソエテヨカル、也、此札ハ生々世々ステサルナリ、決定業也、二季ノ彼岸ノ間ノワサヲ  
ハ、善ニテモ悪ニテモ此二ノ札ニカキツケラル、カ故ニ、決定業ト云也、コノ評定衆ヲ申セハ、色界頂  
ノ玉女、道祖神等、人中天上ノ冥官冥衆、一(三ウ)切ノ諸神集会シテ、天尊八神ニ勅シテ三卷ノ書ヲ  
録シテ、衆生ノ罪福ヲサタム、是ヲ天尊ノ正印トイフナリ、天尊トハ、自在天ヲ申也、勅ヲカフムル  
八神トハ、天帝釈ト炎魔王ト 天大將軍ト 天一ト神ト 行役神ト 司命ト 司祿ト 俱生神ト 等也、經ニ三復八校年  
二大奏ト云ハ、三復トハ、八神ヨリアヒテ、先ノ日記ヲ日ノウチニ三度復スルナリ、八神各々勘録帳ヲ

天尊ニソナヘタ」(四才)テマツル時、若日記ヤアマラント、毎月六度ヨミ合テ校合スル也、前ノ五度、  
閻摩御前ニテカンカヘ、後、一度ハ帝釈ノ御前ニテ校合スル也。天尊ト申ハ、魔醯首羅、色界頂ノ大自在  
天、本地八十地ノ菩薩ニテマシマス、春ノ彼岸帳ハ、去年秋八月已後ノ一切ノ善悪ヲシルシ、八月ノ彼  
岸帳ハ、春ノ彼岸ヨリノチノ一切衆生ノワサヲ注シナリ、コノ勘帳ヲ決定業トイフ、是「経」(四ウ)三  
復八校年ニ大奏トイフナリ、天正樹ノ花ハ風吹スクルアトヘ、サカサマ五百里クンスル華也、已上春ノ  
彼岸也、次八月彼岸ハ、二月ヨリ八月マテノ一切衆生業ヲシルス也、常ノコノミハ、花ヨリノチクチテ  
オツルモアリ、此天正樹ノ菓ハ、一切衆生ノカスニアタル、花菓ナルアヒタ、花菓モ一ニテモクチクサ  
ラス、瑠璃ノコトクスキトヨリテ、木ニ随フ菓ナレハ、モタイノ如ク大也、モタイトハツボナリ、枝ニモ  
タイ」(五才)ヲカケタルカ如シ、春花ハスカタヲ以テ花ニアタル人名カキ、其業ヲシルス、秋ハ一切ノワ  
サ瑠璃ノ如クスキトヨリタル菓コノミ、ウツルヲ、太歳八神等ソノ人善悪ヲシルス也、何事委モ春ハノ彼岸カハ  
ルヘカラス、上ヲ以テ可レ知云、

○彼岸功德云、昔梅檀花仏時、在貧人修彼岸、善転貧苦成富貴、乃至今日成仏、即我身是也、○彼岸七

日一有異名、初日 扱法菩提日ト云、二日 精進日ト云、三日「(五ウ) 輕安菩提日ト云、四日 正念日ト云、五日 修菩提日ト云、六日 禪定日ト云、七日 喜菩提日ト云云、

### 見聞隨身鈔卷上

#### 第一 彼岸本說事

善住陀羅尼經云、帝釈天王住処有樹、名善住陀羅樹、其木花菓俱顯衆生善惡、復顯衆生壽長短、其木北方有善法堂、此帝釈天王住処也、此天王每月六吉日從「(六才) 天下、記衆生善惡、月八日 下使者、十四日 下太子、十五日 自下矣、竜樹菩薩天正驗記云、欲界六天中央、夜摩天兜率天中有大城、名曰中陽院、中有高樓閣、号雲処台、此院内、年二八月七箇日間、色界頂魔醯首羅天尊為上首八神并大梵天王、太歳神、乃至玉女、道祖等人中天上冥官冥衆集会、注一切善惡、天尊降教勅、八神持三卷勘帳三復八校「(六ウ) 獻天尊、覽了、為証善帳一指宝印、為証惡帳一指縛印、為証処中善一指非宝非縛印、彼

八神者、帝釈閻王天大將軍天一行役司命司祿俱生神也、問、彼天尊有何由、以二八月一  
 降天正勅、召二天地神、答、阿迦尼吒天自在尊所居宮殿前有<sub>ニ</sub>高樹、名<sub>ニ</sub>天生樹、形如<sub>チ</sub>須  
 呂、春開、華有<sub>ニ</sub>七日散、七葉七色、有<sub>ニ</sub>青黃赤白黑紫翠、秋結、葉有<sub>ニ</sub>七日落、七葉七  
 色、如<sub>レ</sub>上見開〔七才〕華移<sub>ニ</sub>中院、見<sub>ニ</sub>落花還<sub>ニ</sub>本宮、定<sub>テ</sub>知、法尔道理所<sub>レ</sub>令然也矣、仏説  
 彼岸功德成就經云、疾成<sub>ニ</sub>仏道、汝等當<sub>レ</sub>知、二八月七日在<sub>ニ</sub>昼夜同時、一切諸仏乃無<sub>レ</sub>數万  
 億菩薩、説<sub>レ</sub>法於<sub>ニ</sub>衆生与<sub>レ</sub>樂矣、速出生死到彼岸經云、若欲<sub>レ</sub>求学<sub>ニ</sub>者、於<sub>ニ</sub>諸歲中二八月節入<sub>ニ</sub>  
 彼岸一時上、沐浴<sub>ニ</sub>塵穢以<sub>ニ</sub>清淨心持<sub>ニ</sub>齋戒法<sub>ニ</sub>七日七夜、於<sub>ニ</sub>仏道法<sub>ニ</sub>決定無<sub>レ</sub>疑當<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>阿  
 耨多羅三藐三菩提<sub>ニ</sub>矣、智論云、彼岸一日善根勝<sub>ニ</sub>余百日〔七ウ〕善、時極間經文句云、三復八  
 校年二大奏矣、三復者、八神各為<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>不落忘<sub>ニ</sub>調帳<sub>ニ</sub>記文<sub>ニ</sub>、每日三度私復<sub>レ</sub>之也、八校  
 者、八神各經<sub>ニ</sub>天<sub>レ</sub>覽<sub>ニ</sub>時、為<sub>レ</sub>恐彼違失<sub>ニ</sub>、每月六齋日讀<sub>ニ</sub>合<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>也、前五日於<sub>ニ</sub>閻摩庭<sub>ニ</sub>讀<sub>ニ</sub>校  
 之、晦日於<sub>ニ</sub>帝釈床前<sub>ニ</sub>讀<sub>ニ</sub>校<sub>レ</sub>之、此云<sub>ニ</sub>大奏<sub>ニ</sub>、春献帳<sub>ニ</sub>注<sub>ニ</sub>二八月己<sub>レ</sub>後百<sub>レ</sub>八十箇日<sub>ニ</sub>一切  
 事、秋献帳<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>二月己<sub>レ</sub>後百<sub>レ</sub>八十箇日<sub>ニ</sub>一切事、彼三卷調帳者、付<sub>ニ</sub>衆生造業<sub>ニ</sub>、有<sub>ニ</sub>善惡<sub>レ</sub>処中<sub>ニ</sub>三

種、故八神記文有三卷（八才）差別也、二八月七日神道名天正、天竺号二時正、大  
唐云彼岸云、昼夜同時止觀均等也、人中天上同修善根日、小善大果会日也、譬如弓箭相  
応時成功、定弓惠矣云、彼岸、渡生死此岸、到涅槃彼岸、故云彼岸云、

## 第二正五九月之事

智論云、天帝釈以大宝録共諸大衆、從正月一日記南州衆生善根、二月東州、三月北州、四  
月還至此、九月亦然也矣、金剛童子軌意（八ウ）云、順廻、故正月南、二月西、三月北、四  
月東也、帝釈於一切利天坤善法堂、正五九月向南州記善惡、二六十月向西州記善惡、三七  
十一月向北州記善惡、四八十月向東州記善惡、故殊更南州衆生正五九月止惡修善  
也云、

## 第三六齐日十齐日等之事

齊法陀羅尼經云、六齋十齋八王齋六合齋、一日十八日彼岸乃至百日千日、年三齋戒可勤行、但於時有增減、卯時齋得二十萬劫、辰時齋七十萬劫、巳時齋六十萬劫、午時齋五十萬劫、從是以後鬼神食時、若自不為齋、々料奉三宝、男子生智福自在身、女子生端正万福、六齋者、八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、十齋者、六齋加二日、十八日、二十四日、二十八日、六齋十齋時、生切利天、三大齋日者、正五九月一日、生十方淨土也、八王齋者、正四七十月一日、二六九十二月三十日、六合齋者、正五九月一日、十五日、八王齋六合齋、(九ウ)功德生弥勒淨土也、一日十八日齋生觀音淨土也、太賢古迹云、六齋日者、黑黃白各三、謂、八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、鬼神得勢傷人、為令免危害、故須制矣、智論十三云、此日惡鬼遂人、欲奪人命、疾病凶衰令中不吉、此故、劫初聖人教持齋、作福以避凶衰、是時齋不受八戒、直以二日不食為齋、仏出世教訓之言、汝當一日一夜如諸仏持八戒、過中不食、是功德將人至(十才)涅槃一矣、大乘義章云、八戒齋者、不殺、不盜、不姪、不妄語、不飯酒、不歌舞唱伎、不著

香薰衣、不上高広坐、不過中食矣、初八戒、後一齋也、業報差別經云、持齋人得十種功德、一蒙一切諸佛慈悲、二得一切人民敬禮、三得鬼神守護、四得強力利益、五得二万病消除、六得善神守護、七得真実衣服、八得諸天擁護、九得自然供養、十得生十方淨土矣、〔五〕緣經云、六者日五辛食人如馬屎食、〔十ウ〕虫食、肉鳥食、如父母肉食、夫妻同牀臥、成大毒蛇墮地獄矣、帝釈善集經云、五辛食人九十日其氣不失、肉食七十日、鳥食五十日、魚食三十日、酒飲七日、姪欲三日矣、

#### 第四出家功德之事 略抄

出家功德經云、若放男女奴婢人民出家、功德无量、譬四天下滿中羅漢百歲供養、不如下有人為涅槃故、一日一夜出家受戒、功德无量、又如下起七宝塔、高中三十三天上、不如出家功〔十一才〕德矣、花手經云、雖不受禁戒、心常離諸惡、開定惠行德、是名真出家、不服染衣、心無所染著、於佛法中、是名真出家矣、賢愚經云、一日一夜出家、人猶十



二劫不<sub>レ</sub>隨<sub>三</sub>惡道<sub>一</sub>、常<sub>ニ</sub>生<sub>三</sub>天上<sub>一</sub>矣、又云、若<sub>シ</sub>檀越<sub>ニ</sub>將<sub>レ</sub>來<sub>ニ</sub>末<sub>ニ</sub>世<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>乘<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>盡<sub>一</sub>、正<sub>シク</sub>使<sub>下</sub>蓄<sub>ニ</sub>妻<sub>一</sub>挾<sub>中</sub>子<sub>上</sub>  
 四人以上名字、僧衆<sub>ニ</sub>応<sub>下</sub>當<sub>ニ</sub>禮<sub>一</sub>敬、如<sub>中</sub>舍利弗<sub>上</sub>大目連<sub>上</sub>等<sub>上</sub>、又云、若<sub>シ</sub>打<sub>レ</sub>罵<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>戒<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>身<sub>一</sub>著<sub>ニ</sub>袈  
 裟<sub>一</sub>、罪<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>二<sub>一</sub>万<sub>一</sub>億<sub>一</sub>仏身<sub>一</sub>血<sub>一</sub>、若<sub>シ</sub>有<sub>ニ</sub>衆<sub>一</sub>生<sub>ニ</sub>、為<sub>ニ</sub>我<sub>一</sub>法<sub>一</sub>剃<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>鬚<sub>一</sub>髮<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>服<sub>一</sub>袈<sub>一</sub>裟<sub>一</sub>、設<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>持<sub>一</sub>  
 (十一ウ)戒、彼<sub>レ</sub>等<sub>レ</sub>悉<sub>レ</sub>已<sub>ニ</sub>涅<sub>一</sub>槃<sub>一</sub>為<sub>ニ</sub>二<sub>一</sub>印<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>印<sub>一</sub>也、是<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>猶<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>諸<sub>一</sub>天<sub>一</sub>人<sub>一</sub>示<sub>ニ</sub>涅<sub>一</sub>槃<sub>一</sub>道<sub>一</sub>、是  
 人<sub>一</sub>便<sub>レ</sub>已<sub>ニ</sub>於<sub>三</sub>三<sub>一</sub>宝<sub>一</sub>中<sub>一</sub>、心<sub>一</sub>生<sub>ニ</sub>敬<sub>一</sub>信<sub>一</sub>、勝<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>一切<sub>一</sub>九<sub>一</sub>十五<sub>一</sub>種<sub>一</sub>外<sub>一</sub>道<sub>一</sub>、其<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>必<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>速<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>涅<sub>一</sub>槃<sub>一</sub>、  
 勝<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>一切<sub>一</sub>在<sub>ニ</sub>家<sub>一</sub>俗<sub>一</sub>人<sub>一</sub>、唯<sub>レ</sub>除<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>家<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>忍<sub>一</sub>人<sub>一</sub>、是<sub>レ</sub>故<sub>一</sub>天<sub>一</sub>人<sub>一</sub>応<sub>ニ</sub>當<sub>ニ</sub>供<sub>レ</sub>養<sub>一</sub>矣、大<sub>レ</sub>悲<sub>レ</sub>經<sub>一</sub>云、仏<sub>一</sub>告<sub>ニ</sub>阿  
 難<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>將<sub>レ</sub>來<sub>ニ</sub>世<sub>一</sub>法<sub>一</sub>欲<sub>ニ</sub>滅<sub>一</sub>盡<sub>一</sub>時、當<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>比<sub>一</sub>丘<sub>一</sub>比<sub>一</sub>丘<sub>一</sub>尼<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>我<sub>一</sub>法<sub>一</sub>中<sub>一</sub>得<sub>ニ</sub>出<sub>一</sub>家<sub>一</sub>、己<sub>レ</sub>手<sub>一</sub>牽<sub>ニ</sub>兒  
 臂<sub>一</sub>、而<sub>レ</sub>共<sub>レ</sub>遊<sub>一</sub>行<sub>一</sub>彼<sub>一</sub>酒<sub>一</sub>家<sub>一</sub>至<sub>ニ</sub>酒<sub>一</sub>家<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>我<sub>一</sub>法<sub>一</sub>中<sub>一</sub>作<sub>ニ</sub>非<sub>一</sub>梵<sub>一</sub>行<sub>一</sub>、彼<sub>レ</sub>等<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>酒<sub>一</sub>因<sub>一</sub>緣<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>賢  
 劫<sub>一</sub>中<sub>一</sub>、當<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>二<sub>一</sub>才<sub>一</sub>(十二才)千<sub>一</sub>一<sub>一</sub>興<sub>レ</sub>出<sub>一</sub>我<sub>レ</sub>為<sub>中</sub>弟<sub>上</sub>子<sub>上</sub>、次<sub>ニ</sub>後<sub>一</sub>彌<sub>レ</sub>勒<sub>レ</sub>當<sub>ニ</sub>補<sub>ニ</sub>我<sub>一</sub>所<sub>一</sub>、乃<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>最<sub>一</sub>後<sub>一</sub>盧<sub>一</sub>至  
 如<sub>レ</sub>來<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>第<sub>レ</sub>汝<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>知<sub>一</sub>、阿<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>於<sub>ニ</sub>我<sub>一</sub>法<sub>一</sub>中<sub>一</sub>、但<sub>レ</sub>使<sub>下</sub>性<sub>一</sub>是<sub>ニ</sub>沙<sub>一</sub>門<sub>一</sub>行<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>稱<sub>ニ</sub>沙<sub>一</sub>門<sub>一</sub>、形<sub>レ</sub>似<sub>ニ</sub>沙<sub>一</sub>門<sub>一</sub>  
 尚<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>被<sub>中</sub>著<sub>上</sub>袈<sub>上</sub>沙<sub>上</sub>者<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>二<sub>一</sub>賢<sub>一</sub>劫<sub>一</sub>、彌<sub>レ</sub>勒<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>首<sub>一</sub>乃<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>盧<sub>一</sub>至<sub>ニ</sub>如<sub>一</sub>來<sub>一</sub>、彼<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>門<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>仏<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>於<sub>ニ</sub>無<sub>一</sub>  
 余<sub>レ</sub>涅<sub>一</sub>槃<sub>一</sub>、次<sub>レ</sub>第<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>涅<sub>一</sub>槃<sub>一</sub>無<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>遺<sub>一</sub>余<sub>一</sub>、何<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>故<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>來<sub>一</sub>一切<sub>一</sub>沙<sub>一</sub>門<sub>一</sub>中<sub>一</sub>、乃<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>一<sub>一</sub>稱<sub>ニ</sub>二<sub>一</sub>仏<sub>一</sub>名<sub>一</sub>、一

生<sup>シ</sup>信<sup>ハ</sup>者<sup>ノ</sup>、所作<sup>ノ</sup>功德終<sup>ニ</sup>不<sup>シ</sup>虛<sup>ナ</sup>設<sup>ナ</sup>、我以<sup>ニ</sup>仏智<sup>ヲ</sup>測<sup>リ</sup>知<sup>スルカ</sup>法界<sup>ヲ</sup>一故<sup>ス</sup>矣、又像法決疑經八十二アリト云々、」(十二ウ)

○抑奈良帝之時、有<sup>リ</sup>下横佩<sup>ノ</sup>右大臣<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>人<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、此<sup>ノ</sup>人才智世<sup>ニ</sup>秀<sup>テ</sup>嘉<sup>ナ</sup>名四海余<sup>ニ</sup>、有<sup>リ</sup>一<sup>ノ</sup>息女<sup>ト</sup>、号<sup>ス</sup>中將<sup>ト</sup>姫<sup>ト</sup>、女子三歳時、其母受<sup>ニ</sup>重病<sup>ト</sup>、尽<sup>シ</sup>レ<sup>テ</sup>医<sup>ヲ</sup>窮<sup>ム</sup>術<sup>ヲ</sup>、祈<sup>リ</sup>天<sup>ト</sup>神<sup>ト</sup>、請<sup>フ</sup>地祇<sup>ト</sup>、雖然<sup>リト</sup>、定業難<sup>レ</sup>遁<sup>レ</sup>、更<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>無<sup>レ</sup>益<sup>ト</sup>、婦謂<sup>ニ</sup>大臣<sup>ト</sup>曰<sup>ク</sup>、我初<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup>時<sup>ト</sup>、水<sup>ト</sup>火<sup>ト</sup>中<sup>ニ</sup>我<sup>ト</sup>与<sup>レ</sup>君<sup>ト</sup>諸<sup>ト</sup>共<sup>ト</sup>、有<sup>リ</sup>一<sup>ノ</sup>契<sup>ト</sup>約<sup>ト</sup>、若<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>契<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>朽<sup>セ</sup>、冥途之道、閻魔之序送<sup>ル</sup>乎、大臣垂<sup>レ</sup>涙<sup>ク</sup>曰<sup>ク</sup>、有<sup>リ</sup>一<sup>ノ</sup>独生<sup>ト</sup>独死<sup>ト</sup>理<sup>ト</sup>、自業自得<sup>ニ</sup>義<sup>ト</sup>、同<sup>シ</sup>入<sup>ル</sup>炎<sup>ト</sup>中<sup>ニ</sup>、隔生即忘<sup>ル</sup>何<sup>ノ</sup>有<sup>ル</sup>益<sup>乎</sup>、唯<sup>ラ</sup>自<sup>ラ</sup>剃<sup>シ</sup>除<sup>シ</sup>鬢髮<sup>ト</sup>、仕<sup>ヘ</sup>レ<sup>テ</sup>仏<sup>ト</sup>無<sup>ク</sup>他事<sup>ト</sup>一訪<sup>シ</sup>後世<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>、婦曰<sup>ク</sup>、世間皆<sup>ハ</sup>一(十三才)虚<sup>ト</sup>假<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>、駕<sup>ス</sup>鶩<sup>ト</sup>之<sup>レ</sup>契<sup>ト</sup>断<sup>リ</sup>金<sup>ト</sup>之交<sup>ト</sup>中有<sup>モ</sup>友<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>成<sup>ル</sup>乎<sup>ト</sup>、唯西方<sup>ニ</sup>仏<sup>ト</sup>是<sup>レ</sup>為<sup>リ</sup>我<sup>ト</sup>依<sup>ル</sup>怙<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、良久<sup>シテ</sup>而又<sup>ク</sup>曰<sup>ク</sup>、念<sup>シ</sup>仏<sup>ト</sup>欲<sup>シ</sup>往<sup>ル</sup>生<sup>ト</sup>中<sup>ニ</sup>、姫一人懸<sup>レ</sup>心<sup>ト</sup>作<sup>ル</sup>来生<sup>ト</sup>縛<sup>ト</sup>、努<sup>ク</sup>々<sup>ク</sup>及<sup>ニ</sup>二十歳<sup>ト</sup>比<sup>ト</sup>、莫<sup>ク</sup>見<sup>ル</sup>他人<sup>ト</sup>、大臣曰<sup>ク</sup>、為<sup>レ</sup>我<sup>ト</sup>子<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、更<sup>ニ</sup>莫<sup>ク</sup>歎<sup>ル</sup>悲<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、婦喜<sup>ヒテ</sup>見<sup>テ</sup>姫<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>、人間果報雖<sup>ト</sup>逼<sup>ト</sup>、不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>二十歳<sup>ト</sup>而母離<sup>ル</sup>、尤<sup>モ</sup>悲<sup>シ</sup>、汝後念<sup>シ</sup>仏<sup>ト</sup>助<sup>テ</sup>我<sup>ト</sup>来生<sup>ト</sup>、則命終<sup>ス</sup>矣<sup>ト</sup>、似<sup>ル</sup>月姿<sup>ト</sup>為<sup>レ</sup>煙<sup>ト</sup>有<sup>リ</sup>為<sup>レ</sup>雲<sup>ト</sup>上<sup>ニ</sup>、如<sup>ク</sup>華形<sup>ト</sup>為<sup>レ</sup>灰<sup>ト</sup>无<sup>ク</sup>常<sup>ト</sup>風散<sup>ル</sup>、残<sup>ル</sup>者<sup>ト</sup>空<sup>ク</sup>白<sup>ク</sup>骨<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、大臣詠<sup>シテ</sup>

曰、夜ト共ニ思ヒアカシテサミレハノモキ、 姫（十三ウ）七歳春比、至テ南園一見ニ桜花一見幼者二人有レ遊ニ花間一、  
ヤキトトケフリト成キヘハテニテリ  
于時夫婦来折レ花、与ニ幼者一、女子ヲ婦懷ル婦、男子ヲ夫携テ行、姫見レ之彼何者乎、乳母、  
曰、父母懷ニ兄弟一婦云、姫顔色替垂レ涙曰、人皆有レ父母、我者有レ父無レ母如レ何、妳母曰、君  
三歳時、無レ墓成リ、リ下アト 姫展フシマコヒ転歎悲、謂テ父曰、何人也トモ、母之形見、父其夏比ヨリ 継母使ニ相見、  
姫喜如ニ実一母一思、毛髮不レ違、而シテ 姫請テ僧受テ称讚浄土経一、每日読シ誦六（十四才）卷一資一  
福亡母一、父見レ之益ス 寵一愛、継母憎レ疾（スルコト） 姫一甚矣、姫十三歳時、容顔美麗ニシテ 似ニ貴妃一如ニ李夫  
人一、聞ニ禁闕一、名ニ雲上一、故可ニ成ニ院一内一后一有ニ宣一旨一也、父大臣大喜、秋宮可レ入（マイラスル  
心、継母弥々嫉、語ニ有人一、著セ冠リ 姫之方令ニ出入一、讒レ姫、父大臣早天見ニ姫之方一、如ハ廿男  
白直一垂レ折鳥一帽子一著者如レ迷而退、継母曰、非ニ唯一人一、或ハ束帶著人、或ハ狩衣立烏帽  
子著者、或ハ薄衣冠人、如レ何女房乎見テ法師也、如レ是数人契ニ浅（十四ウ）間敷語、  
大臣流レ涙大曠曰、口惜振舞未レ曾有也、若聞ニ世間一豊成家可ニ耻一辱一、急失不レ可レ如レ之、  
召ニ武士一、姫宇多郡日張山云処具行、可レ勿レ頸、武士中将具申、彼山奥、谷川有レ处居（スヘ

置<sup>キ</sup>、父<sup>ノ</sup>仰<sup>ヲ</sup>謂<sup>ル</sup>、爾<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>、姪<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>、吾<sup>レ</sup>先<sup>ニ</sup>世<sup>ノ</sup>宿<sup>ノ</sup>業<sup>ニ</sup>淺<sup>シ</sup>猿<sup>シ</sup>、汝<sup>ノ</sup>之<sup>カ</sup>手<sup>ヲ</sup>掛<sup>ニ</sup>、事<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>力<sup>ノ</sup>、暫<sup>ク</sup>待<sup>テ</sup>、我<sup>レ</sup>自<sup>ニ</sup>七<sup>ノ</sup>歲<sup>ニ</sup>、時<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>悲<sup>メ</sup>母<sup>ノ</sup>、日<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>六<sup>ノ</sup>卷<sup>ニ</sup>誦<sup>ス</sup>小<sup>ノ</sup>經<sup>ヲ</sup>、今<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>誦<sup>マ</sup>、今<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>誦<sup>テ</sup>廻<sup>ニ</sup>向<sup>セ</sup>、非<sup>母</sup>之<sup>カ</sup>苦<sup>ニ</sup>提<sup>ス</sup>我<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>之<sup>カ</sup>後<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>、武<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>非<sup>ニ</sup>岩<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>、太<sup>ノ</sup>刀<sup>ヲ</sup>指<sup>シ</sup>置<sup>キ</sup>經<sup>ル</sup>時<sup>ヲ</sup>、姫<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>經<sup>ヲ</sup>取<sup>リ</sup>、(十五才)出<sup>シ</sup>、三<sup>ノ</sup>卷<sup>ニ</sup>誦<sup>シ</sup>給<sup>ヒ</sup>向<sup>ヒ</sup>西<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>合<sup>シ</sup>掌<sup>シ</sup>、曰<sup>ク</sup>、今<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>卷<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>父<sup>ノ</sup>現<sup>ノ</sup>當<sup>ノ</sup>、御<sup>ノ</sup>祈<sup>ヲ</sup>禱<sup>シ</sup>、一<sup>ノ</sup>卷<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>母<sup>ノ</sup>聖<sup>ノ</sup>靈<sup>ヲ</sup>出<sup>シ</sup>離<sup>シ</sup>生<sup>ヲ</sup>死<sup>ヲ</sup>往<sup>シ</sup>生<sup>ヲ</sup>極<sup>ノ</sup>樂<sup>ニ</sup>、今<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>卷<sup>ヲ</sup>又<sup>ク</sup>唱<sup>フ</sup>、仏<sup>ノ</sup>号<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>功<sup>ノ</sup>德<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>悲<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>同<sup>ク</sup>得<sup>ニ</sup>蓮<sup>ノ</sup>託<sup>シ</sup>生<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>樂<sup>ニ</sup>、廻<sup>テ</sup>向<sup>テ</sup>畢<sup>シ</sup>曰<sup>ク</sup>、武<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>、汝<sup>ノ</sup>深<sup>ク</sup>可<sup>レ</sup>隱<sup>シ</sup>我<sup>ノ</sup>耻<sup>ヲ</sup>、表<sup>シ</sup>衣<sup>ヲ</sup>脱<sup>ク</sup>与<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、命<sup>ヲ</sup>惜<sup>ム</sup>何<sup>ノ</sup>等<sup>ニ</sup>、父<sup>ノ</sup>謂<sup>ク</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>シ</sup>、十<sup>ノ</sup>念<sup>ノ</sup>滿<sup>シ</sup>足<sup>シ</sup>、時<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>切<sup>シ</sup>頸<sup>ヲ</sup>、長<sup>ク</sup>余<sup>ノ</sup>綠<sup>ノ</sup>髮<sup>ヲ</sup>、唐<sup>ノ</sup>輪<sup>ヲ</sup>高<sup>ク</sup>結<sup>シ</sup>上<sup>テ</sup>、念<sup>シ</sup>仏<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>遍<sup>ノ</sup>計<sup>リ</sup>申<sup>ス</sup>、南<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>西<sup>ニ</sup>方<sup>ノ</sup>極<sup>ノ</sup>樂<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>、教<sup>ノ</sup>主<sup>ノ</sup>阿<sup>ノ</sup>弥<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>如<sup>ノ</sup>來<sup>ノ</sup>、五<sup>ノ</sup>障<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>從<sup>ニ</sup>罪<sup>ヲ</sup>深<sup>ク</sup>共<sup>シ</sup>、以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>功<sup>ノ</sup>德<sup>ニ</sup>本<sup>ノ</sup>願<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>誤<sup>シ</sup>來<sup>テ</sup>迎<sup>テ</sup>引<sup>ク</sup>、(十五ウ)接<sup>シ</sup>合<sup>シ</sup>掌<sup>シ</sup>、十<sup>ノ</sup>念<sup>ノ</sup>滿<sup>シ</sup>、最<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>乎<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>待<sup>チ</sup>給<sup>フ</sup>、武<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>見<sup>ル</sup>容<sup>ノ</sup>貌<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>違<sup>フ</sup>秋<sup>ノ</sup>月<sup>ヲ</sup>出<sup>ル</sup>山<sup>ノ</sup>端<sup>ニ</sup>、相<sup>シ</sup>同<sup>シ</sup>芙<sup>ノ</sup>蓉<sup>ノ</sup>咲<sup>ク</sup>、池<sup>ノ</sup>面<sup>ニ</sup>金<sup>ノ</sup>釵<sup>ヲ</sup>長<sup>ケ</sup>余<sup>ノ</sup>、柳<sup>ノ</sup>髮<sup>ヲ</sup>払<sup>レ</sup>地<sup>ヲ</sup>、愛<sup>シ</sup>敬<sup>シ</sup>眸<sup>ヲ</sup>、丹<sup>ノ</sup>果<sup>ヲ</sup>唇<sup>ヲ</sup>、雲<sup>ノ</sup>鬢<sup>ヲ</sup>、雪<sup>ノ</sup>曠<sup>ヲ</sup>、絶<sup>シ</sup>二<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>語<sup>ヲ</sup>、難<sup>シ</sup>及<sup>フ</sup>筆<sup>ニ</sup>、故<sup>ニ</sup>目<sup>ヲ</sup>冥<sup>ク</sup>魂<sup>ヲ</sup>消<sup>ス</sup>、俯<sup>シ</sup>流<sup>シ</sup>悲<sup>ノ</sup>淚<sup>ヲ</sup>、姫<sup>ノ</sup>顧<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>、汝<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>覺<sup>シ</sup>仁<sup>ノ</sup>何<sup>ノ</sup>使<sup>レ</sup>我<sup>ヲ</sup>積<sup>ツ</sup>思<sup>フ</sup>、早<sup>ク</sup>速<sup>ク</sup>可<sup>レ</sup>害<sup>ス</sup>也<sup>、</sup>武<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>念<sup>シ</sup>一<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>、豈<sup>ニ</sup>弑<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>君<sup>ヲ</sup>、雖<sup>レ</sup>預<sup>ル</sup>賞<sup>ヲ</sup>一<sup>ノ</sup>祿<sup>ニ</sup>、争<sup>カ</sup>保<sup>シ</sup>二<sup>ノ</sup>万<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>齡<sup>ヲ</sup>、雖<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>行<sup>ニ</sup>死<sup>ニ</sup>刑<sup>ノ</sup>流<sup>罪</sup>、命<sup>ヲ</sup>奉<sup>レ</sup>助<sup>ケ</sup>思<sup>フ</sup>、即<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>山<sup>ニ</sup>構<sup>ニ</sup>蓬<sup>ノ</sup>戸<sup>ヲ</sup>、召<sup>ヒ</sup>我<sup>ノ</sup>妻<sup>ヲ</sup>令<sup>シ</sup>守<sup>シ</sup>護<sup>シ</sup>、自<sup>ラ</sup>登<sup>テ</sup>山<sup>ノ</sup>樵<sup>ヲ</sup>薪<sup>ヲ</sup>、下<sup>テ</sup>里<sup>ニ</sup>拾<sup>フ</sup>穂<sup>ヲ</sup>、或<sup>ハ</sup>越<sup>テ</sup>二<sup>ノ</sup>紀<sup>ノ</sup>伊<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>、(十六才)熊<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>道

一者<sup>ニ</sup>乞<sup>レ</sup>食<sup>ヲ</sup>、或出<sup>ニ</sup>河内地<sup>ニ</sup>、吉野詣<sup>マツテ</sup>人得<sup>ニ</sup>慈<sup>ヲ</sup>、姫君奉<sup>ル</sup>養<sup>ヒ</sup>、去<sup>ル</sup>程<sup>ニ</sup>、姫十四歳<sup>ノ</sup>春比<sup>ノ</sup>、彼<sup>ノ</sup>武士受<sup>テ</sup>重病<sup>ヲ</sup>、七日<sup>メニ</sup>死畢<sup>ス</sup>、姫之心<sup>ニ</sup>親<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>後<sup>ル</sup>、淚断<sup>レ</sup>腸<sup>ヲ</sup>、蓬生<sup>ノ</sup>宿<sup>ニ</sup>為<sup>シ</sup>追<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>、而告<sup>テ</sup>妻女<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、以<sup>テ</sup>方便<sup>ヲ</sup>、拵<sup>ヨ</sup>料<sup>一</sup>紙<sup>一</sup>、書<sup>シ</sup>写<sup>シ</sup>稱讚<sup>シ</sup>浄土<sup>一</sup>經<sup>一</sup>千卷<sup>一</sup>、汝<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>亡夫<sup>ノ</sup>之後生<sup>一</sup>、兼資<sup>ニ</sup>悲母<sup>ノ</sup>之菩提<sup>一</sup>矣、妻女出<sup>テ</sup>里<sup>ニ</sup>、求<sup>ニ</sup>得<sup>シ</sup>紙<sup>一</sup>与<sup>フ</sup>姫君<sup>一</sup>、即无<sup>ク</sup>昼<sup>ト</sup>無<sup>ク</sup>夜<sup>ト</sup>書<sup>キ</sup>彼<sup>ノ</sup>御經<sup>一</sup>、既<sup>ニ</sup>十五歳<sup>ニ</sup>成<sup>リ</sup>、是<sup>ノ</sup>年<sup>ニ</sup>春<sup>ニ</sup>、父<sup>ノ</sup>大臣<sup>ニ</sup>召<sup>シ</sup>佐登<sup>サト</sup>連<sup>一</sup>曰<sup>ク</sup>、余寒<sup>ニ</sup>已<sup>リ</sup>去<sup>リ</sup>、峰<sup>ノ</sup>雪消<sup>レ</sup>谷<sup>ノ</sup>冰解<sup>リ</sup>、於<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>張山<sup>ニ</sup>七日<sup>ノ</sup>狩<sup>シ</sup>而遊<sup>シ</sup>、連催<sup>シ</sup>狩<sup>一</sup>〔十六ウ〕人<sup>一</sup>供奉<sup>マル</sup>、大臣入<sup>リ</sup>彼<sup>ノ</sup>山<sup>ニ</sup>上<sup>リ</sup>峨々<sup>タル</sup>峰<sup>ニ</sup>、下<sup>リ</sup>幽々<sup>タル</sup>谷<sup>ニ</sup>、奮<sup>ニ</sup>迅遊<sup>シ</sup>戲<sup>シ</sup>、是<sup>ニ</sup>僅<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>芝菴<sup>一</sup>、細煙<sup>ル</sup>上<sup>リ</sup>木間<sup>ニ</sup>、大臣曰<sup>ク</sup>、人居<sup>ル</sup>处<sup>ナル</sup>乎<sup>、</sup>皆曰<sup>ク</sup>、不<sup>レ</sup>知<sup>、</sup>即怪<sup>ミ</sup>走<sup>シ</sup>下<sup>リ</sup>馬<sup>一</sup>見<sup>ニ</sup>之<sup>、</sup>如<sup>ゴ</sup>五十<sup>ノ</sup>女<sup>有</sup>、側<sup>ニ</sup>十四<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>歳<sup>無</sup>レ<sup>、</sup>止<sup>メ</sup>美女<sup>覆</sup>一<sup>面</sup>而寄<sup>リ</sup>掛<sup>リ</sup>文<sup>一</sup>机<sup>一</sup>、書<sup>ス</sup>写<sup>ス</sup>御經<sup>一</sup>、大臣下<sup>レ</sup>馬<sup>一</sup>言<sup>ク</sup>、汝<sup>ハ</sup>非<sup>ニ</sup>実<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>、定<sup>テ</sup>知<sup>、</sup>是<sup>ノ</sup>处<sup>ノ</sup>山神<sup>老</sup>木<sup>妖</sup>怪<sup>一</sup>欺<sup>ニ</sup>豊成<sup>一</sup>者<sup>乎</sup>、以<sup>レ</sup>箭<sup>ヲ</sup>試<sup>ント</sup>云<sup>、</sup>妻女<sup>驚</sup>怖<sup>而</sup>無<sup>ニ</sup>言<sup>一</sup>詞<sup>一</sup>、俯<sup>レ</sup>地<sup>ニ</sup>而悶<sup>レ</sup>絶<sup>ス</sup>也、姫捨<sup>レ</sup>筆<sup>卷</sup>經<sup>一</sup>、取<sup>リ</sup>覆<sup>レ</sup>面<sup>一</sup>、赤<sup>ニ</sup>顔色<sup>一</sup>而<sup>レ</sup>言<sup>ク</sup>、更<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>變<sup>一</sup>化<sup>一</sup>物<sup>一</sup>、君<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>子<sup>中</sup>將<sup>レ</sup>姫<sup>也</sup>、依<sup>テ</sup>繼<sup>レ</sup>母<sup>讒</sup>一<sup>当</sup>山<sup>為</sup>一〔十七才〕所<sup>レ</sup>誅<sup>、</sup>然<sup>トモ</sup>愛<sup>シ</sup>感<sup>ケ</sup>助<sup>レ</sup>我<sup>育</sup>ムコト<sup>シ</sup>、如<sup>三</sup>父<sup>一</sup>母<sup>一</sup>養<sup>ニ</sup>愛<sup>子</sup>一<sup>、</sup>而<sup>ル</sup>彼<sup>ノ</sup>武<sup>士</sup>去<sup>ル</sup>春<sup>比</sup>、為<sup>レ</sup>空<sup>也</sup>、果<sup>報</sup>拙<sup>身</sup>命<sup>不</sup>消<sup>、</sup>式<sup>奉</sup>レ<sup>、</sup>見<sup>ル</sup>最<sup>哀</sup>乎<sup>、</sup>実<sup>不</sup>孝<sup>者</sup>、不<sup>レ</sup>得<sup>下</sup>立<sup>ニ</sup>階<sup>天</sup>一而<sup>升</sup>上<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>下</sup>穿<sup>ニ</sup>穴<sup>於</sup>地<sup>一</sup>而<sup>隱</sup>上<sup>、</sup>聞<sup>侍</sup>一也<sup>幾</sup>、

乎、三世諸仏菩薩惡レ我給 哉、俯沈悲泣、大<sub>一</sub>臣聞 急抛<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、接<sub>レ</sub>手膝上置曰、  
汝恨理也、我一旦怨、儘雖<sub>レ</sub>失 愛心無<sub>レ</sub>絶、後<sub>一</sub>悔難<sub>レ</sub>言、同<sub>一</sub>年嬰兒見<sub>レ</sub>長 思<sub>レ</sub>汝事、  
読経念<sub>レ</sub>仏、為<sub>二</sub>蓮託生<sub>一</sub>祈<sub>一</sub>畢、今生再会尚<sub>レ</sub>仏法靈驗也、喜<sub>レ</sub>悅淚漣<sub>レ</sub>（十七ウ）々矣、而<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>  
寄輿<sub>一</sub>、横<sub>レ</sub>佩御所<sub>一</sub>歸矣、去程、繼母讒言為<sub>二</sub>天下嘲<sub>一</sub>哢也、大臣曰、自<sub>レ</sub>断首<sub>一</sub>足<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>別  
離<sub>一</sub>、急離也、辞悖而出者、又悖而入、自作災豈<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>遠乎、惡因惡果道理必然也、終  
煩<sub>二</sub>惡病<sub>一</sub>、路頭迷畢、以<sub>二</sub>此繼母<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>教<sub>二</sub>万人<sub>一</sub>也、姫十六歳夏、可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>后<sub>一</sub>妃<sub>二</sub>女孺誰<sub>一</sub>乎、  
評議也、姫聞<sub>レ</sub>召思惟、適難<sub>レ</sub>受得<sub>二</sub>人身<sub>一</sub>無<sub>二</sub>甲斐<sub>一</sub>、而仮寢夢中<sub>レ</sub>莊色、無<sub>レ</sub>益生<sub>一</sub>死<sub>レ</sub>海浮  
舟、帰<sub>二</sub>三途古郷<sub>一</sub>最口<sub>一</sub>惜<sub>レ</sub>（十八才）哉、無常殺鬼不<sub>レ</sub>恐<sub>二</sub>王侯<sub>一</sub>、閻魔獄<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>無<sub>三</sub>哀<sub>二</sub>后<sub>一</sub>妃<sub>一</sub>、  
今日乘<sub>二</sub>榮花車<sub>一</sub>遊、明日入<sub>二</sub>無間底<sub>一</sub>苦 不<sub>レ</sub>如下<sub>レ</sub>厭<sub>二</sub>浮世<sub>一</sub>離<sub>中</sub> 生死<sub>上</sub>、見<sub>レ</sub>善速<sub>レ</sub>行、待<sub>二</sub>明日<sub>一</sub>  
者何 有<sub>レ</sub>障<sub>一</sub>乎、其夜中思<sub>二</sub>立<sub>一</sub> 出家<sub>一</sub>、捨<sub>レ</sub>親出 不<sub>レ</sub>孝罪有<sub>レ</sub>乎、為<sub>二</sub>奈何<sub>一</sub>案、復思<sub>レ</sub>出  
棄<sub>レ</sub>恩入無<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>真実報恩者<sub>一</sub>文、今不<sub>レ</sub>孝一旦事、吾住<sub>レ</sub>生浄土<sub>一</sub>引<sub>二</sub>導<sub>一</sub> 二<sub>一</sub>親<sub>一</sub>、実報恩也、雖  
然、今亦出<sub>レ</sub>後、式觀<sub>レ</sub> 父難<sub>レ</sub>矣、今一度入<sub>二</sub>最後見<sub>一</sub>參<sub>一</sub>、麗裝束出<sub>二</sub>父之御前<sub>一</sub>、大臣

見レ姫喜テ 矣、姫見レ父ヲ (十八ウ) 垂レ涙ヲ、大臣問ク、何有レ恨ミ乎、姫答シテ 曰、父御顔色已ニ衰老セリ  
也、吾雖レ驕ニ榮華ニ、父共不レ樂者何有レ益、是以歎也、隱レ意設レ辭、大臣曰、皆レ是今  
世風、敢勿レ歎 最嬉氣思也、姫御前退出、夜已及ニ深更ニ、急出立、萑宿荒一  
蕪離別歎習也、況王樓金殿御名殘、又謂ニ恩愛別一、心中推量 哀也、心懸当麻寺一、  
意強出、自奈良彼地迄七里也、足血流出 無不染草一、漸々到ニ当麻寺一、会レ僧請ニ出  
家、僧怪不 (一九才) 免、姫曰、我是孤也、幼少 二親後、今唯有ニ一人一 妳母後  
也、無頼方者、為レ尼人々訪ニ後生一、我身生ニ極樂一也、僧徒之風以ニ慈悲為レ先、有ニ發  
心者何不免一許一 云、僧伏レ理、依レ義即剃除鬢髮一、授ニ戒名一号ニ法如比丘尼一、(遂ニ本意一  
竟後、發ニ誓願一 曰是年十七歲也) 我可レ遂ニ往生一者、七日中觀ニ生身一 弥陀如来、不レ然者自今日一  
永レ出此門戸一、閉籠、爰当第六日一、天平宝字七癸卯曆六月十六日一 (十九ウ) 酉刻、端  
嚴美麗 禪尼一人著ニ黑衣一、来曰、汝心中誓願我知レ之、蓮茎可レ求ニ百馱一、織ニ極樂一 變相一  
与レ之、法如歡喜 告ニ大臣一、々々即仰ニ忍海一 連一、大和、泉州、河内走ニ廻一 三国一、一一兩日中

蓮茎九十九駄運<sup>ニ</sup>上<sup>ス</sup>彼寺<sup>ニ</sup>、化<sup>レ</sup>尼<sup>ハ</sup>、禪尼相共挽<sup>ニ</sup>調<sup>ヘ</sup>蓮糸<sup>一</sup>、道場北使<sup>レ</sup>堀<sup>ニ</sup>一池<sup>一</sup>、水如<sup>レ</sup>常色<sup>也</sup>  
 也、染<sup>ル</sup>糸<sup>ヲ</sup>五色、殊<sup>ル</sup>更<sup>ニ</sup>綠<sup>ニ</sup>紅色深<sup>シ</sup>、今染野池是也、同廿三日酉刻、又如<sup>ハ</sup>十七<sup>ハ</sup>八如<sup>ニ</sup>天人<sup>一</sup>來、  
 向<sup>テ</sup>化<sup>レ</sup>尼<sup>ニ</sup>問<sup>ク</sup>曰、糸染調<sup>乎</sup>、如<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>約束也、化<sup>レ</sup>尼<sup>ハ</sup>答<sup>ク</sup>曰、染<sup>ル</sup>糸<sup>ヲ</sup>待<sup>ツ</sup>汝、  
 女人云、求<sup>ニ</sup>油<sup>一</sup>三升、藁<sup>ニ</sup>三把<sup>一</sup>、即化尼与<sup>レ</sup>之、女人得<sup>レ</sup>之、以<sup>レ</sup>油濯<sup>レ</sup>藁<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>灯、其夜彼寺於<sup>ニ</sup>  
 竹為<sup>レ</sup>軸、掛<sup>ニ</sup>化尼前<sup>一</sup>、向<sup>ニ</sup>西方<sup>ニ</sup>飛<sup>レ</sup>消<sup>ス</sup>矣、化尼說<sup>テ</sup>曼陀羅<sup>一</sup>教<sup>ニ</sup>法如<sup>一</sup>、法如踊躍歡喜<sup>シテ</sup>而詠<sup>ク</sup>曰、  
 放<sup>レ</sup>光皓<sup>ク</sup>々然<sup>タリ</sup>、<sup>レ</sup>二十<sup>ウ</sup>地下、地上、虛空三種<sup>ノ</sup>莊嚴、雜<sup>ニ</sup>七宝<sup>ニ</sup>嚴飾<sup>セリ</sup>、八功德池水、澄<sup>ニ</sup>四辺<sup>ニ</sup>  
 清<sup>タリ</sup>々、七宝池、蓮<sup>ハ</sup>華<sup>ハ</sup>開<sup>テ</sup>四<sup>ニ</sup>色<sup>ニ</sup>亭々、瑠璃地上宝樹葉々相向<sup>シ</sup>花<sup>ハ</sup>花、相準<sup>セリ</sup>、或有<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>棹<sup>ニ</sup>弘誓<sup>ス</sup>  
 船<sup>ニ</sup>所<sup>上</sup>、或有<sup>ニ</sup>説<sup>ク</sup>法衆会<sup>所</sup>、或有<sup>下</sup>自界<sup>ノ</sup>聖衆遊<sup>ニ</sup>戲<sup>シ</sup>宝樹<sup>下</sup>、他<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>菩薩供<sup>ニ</sup>養<sup>ス</sup>、弥陀仏<sup>一</sup>処<sup>ニ</sup>、惣<sup>シテ</sup>  
 明<sup>ス</sup>下左右<sup>ノ</sup>縁<sup>ハ</sup>十三定善觀、中台様<sup>ノ</sup>九品散善果<sup>上</sup>、実<sup>ニ</sup>大乘行<sup>ノ</sup>躰、万<sup>ノ</sup>善功德有<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>曼陀羅<sup>一</sup>、而<sup>シテ</sup>化<sup>レ</sup>  
 尼<sup>ハ</sup>有<sup>ニ</sup>還<sup>ル</sup>婦<sup>ノ</sup>色<sup>一</sup>、禪尼涕泣<sup>シテ</sup>留<sup>ム</sup>、化尼曰、歌<sup>ニ</sup>、此<sup>ノ</sup>二十一<sup>才</sup>寺<sup>ノ</sup>サシモ名<sup>ニ</sup>応<sup>ヒ</sup>トヨ竹<sup>ケ</sup>何<sup>ト</sup>留<sup>ル</sup>ト



二夜トマラシ、ト詠シトフ、我是西方弥陀ハレ、彼織姫左脇弟子観音也、我シテ心ニ汝現ト女人ニ、感シテ誓フ  
来レリト云テ 娑婆ニ、説テ偈フ曰、

往昔迦葉説法所 今來法起作仏事

卿懇西方故我來 一入是場永離苦

汝自リ是以レ後十三年シテ可ト迎フ西方ニ、西ノ空ニ去リトフ、禪尼恍クワウ惚トシテ 思ヒ清然タリ、禪ニ客去テ不レ語ラ、思ラ

唯寄ス淨土夕空ノ、然シテ後人王四十九代光仁天皇室チ「二十一ウ」龜六乙卯曆春三月十四日、異シ香薰シ  
室、音樂聞ヘ空ニ、遂ケ往生ノ素ノ懷ヲ一竟、

于時延宝第五丁巳曆季夏七日写之、  
「(二十二才)」

法、

元録八年、

法然源空上人、

勅号、大師諡成、一夢、

「(二十二ウ)

卅拾二ヶ寺、

此方六ヶ寺、多分、

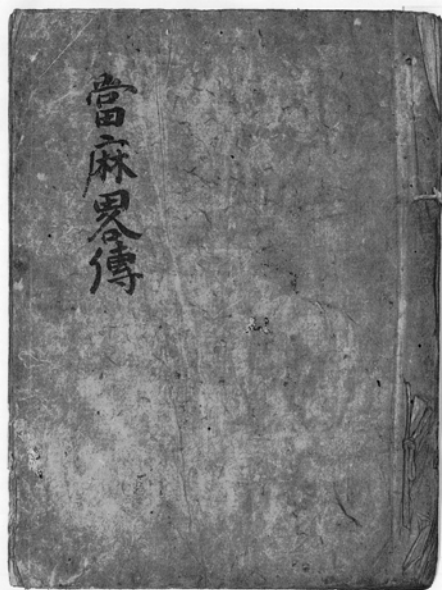
「(裏表紙表二十三才)

(白)

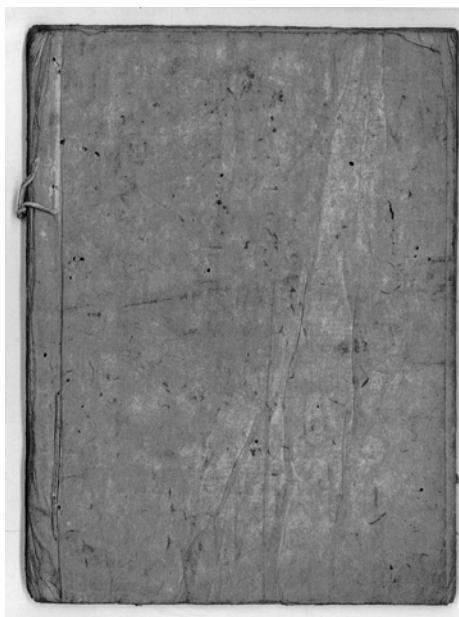
「(裏表紙裏二十三ウ)

(筑波大学名誉教授・元文教大学教授)

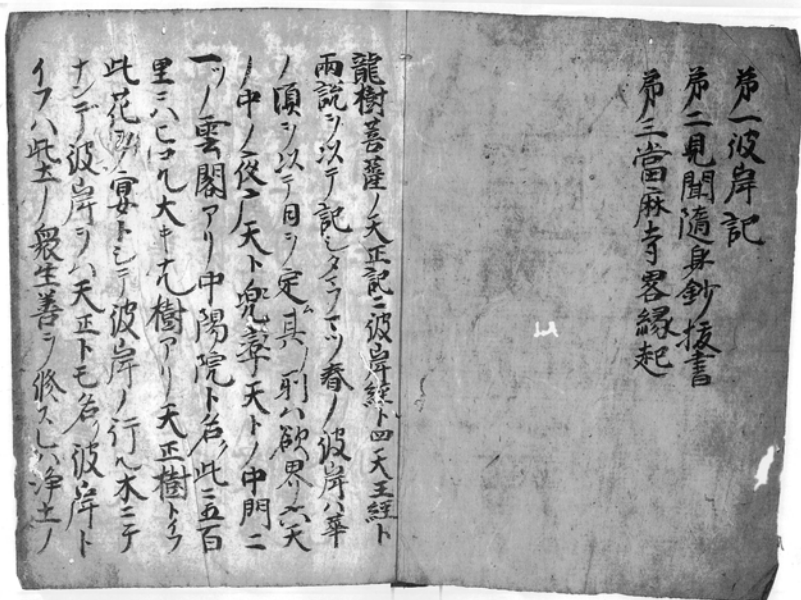
表紙表 (一才)



裏表紙裏 (二十三ウ)



表紙裏 (一ウ)



第一波岸記  
第二見聞隨身鈔抜書  
第三當麻寺畧縁起

龍樹菩薩ノ天正記ニ波岸經ト曰天王經ト  
兩説ヲ以テ記シタラシク春ノ波岸ハ華  
ノ頂ヲ以テ目ヲ定具ノ別ハ欲界ハ天  
ノ中ノ位ニ天ト兜率天トノ中門ニ  
ツノ雲閣アリ中陽院ト名此ニ五百  
里ハヒヨリ大キク樹アリ天正樹ト云  
此花ノ宴トシテ波岸ノ行ハ本ニテ  
ナシテ波岸ヲハ天正トモ名波岸ト  
イフハ此五ノ衆生善ヲ修スハ浄土ノ

(一才)

ツカケ名カ如春花スカタシ以テ花ア  
 タル人各リ中具業シシテ秋一切ノワチ  
 瑠璃ハ始メスキトシリタ元葉ワツルヲ太  
 歳ハ神等ノノ人善恵シルモ何夏  
 春ノ彼岸カハルカラス上リ以テ可  
 ○彼岸功德云有栴檀花佛時夜貪人撥波  
 岸善轉貪苦成富貴乃至今日成佛  
 即我身是也○彼岸七日一有異名  
 初日抄法善提目ト云二日精進目ト云三日

輕安善提目ト云四日正念目ト云五日微  
 善提目ト云六日禪定目ト云七日喜善提目

見聞隨身鈔卷上

第一波岸本說事

善住陀羅尼經云帝釋天王住處有樹  
 名善住陀羅樹其木花果俱顯衆生善  
 惡沒顯衆生壽長短其木北方有善法  
 堂此帝釋天王住處此天王每月六齋日從

千佛興出我爲弟子次後弥勒當稱我  
 所乃至最後盧至如來如是次第沙門應  
 當知何難於我法中但使性見沙門行  
 自稱沙門我似沙門尚有被著要沙者  
 於賢劫弥勒爲首乃至盧至如來彼諸  
 沙門如是佛所於無餘涅槃次第得入  
 涅槃有遺餘何以故如來一切沙門中  
 至一稱佛名一生信者所作功德終不虛設  
 我以佛智測知法界故又復淺疑經云

○柳本長壽之時有橫佩右大臣云人  
 此女智也天喜名四海餘有一息女子中將  
 姫女子三歲時其母受重病蓋醫官窮術  
 祈天神請雨地祇雖然定業難道更以無  
 益婦謂大臣曰我初見時木火中我與君諸共  
 有契約若其罪不行冥途之通關廢之應  
 送于大臣高淚曰有獨生獨死理自業自得義  
 同八炎中隔生即忘向有蓋字唯自刺除  
 髮髮住佛無犯事訖後世云婦且問答

(二十一ウ)

寺すし毛名應、トヨ作何ト留ト二夜トテラ  
 下詠、我是西方、弥陀、波羅、無、无、无、  
 弟子觀音也、升應、汝現、女人、感、持、言、來、  
 迦波、說、偈、曰、  
 住首迦葉、說法、別、今來法起、作佛事  
 卿懇、西方、故、我、來、一入是場、永、離、若  
 汝自是、以後、十三年、前、迎、西方、西、空、去、  
 禪、尼、恍、惚、思、清、然、禪、客、去、不、語、恩、唯、寄、  
 遺、書、入、空、然、後、人、王、四十九、代、光、仁、天、皇、實、  
 適、乙卯、曆、春、三、月、十、四、日、異、香、子、實、室、  
 音、樂、開、空、遊、往、生、素、懷、竟、  
 于時延寶第五丁巳曆季夏七日寫之

(二十二オ)

(二十二ウ)

法  
 元錄八年  
 法然源空上人  
 勅號大師證休身  
 此檢寺  
 此方六寺多分

裏表紙表 (二十三オ)



## 歌舞伎鑑賞教室

六月に国立劇場にて「連獅子」という演目の歌舞伎を鑑賞した。最初に舞台の仕組みや、演出方法、演目に関する解説があった。様々な演出の工夫による表現力と想像以上のダイナミックさに驚きを感じた。本編の「連獅子」はその後に上演された。その内容は次のようなものである。

右近と左近という二人の狂言師が現れ、不思議な石橋について語る。虹のように架かったその石橋は、人の手による物ではなく自然に架かったものだという。二人の狂言師は、そこで「子落とし」をする親子獅子を演じる。親が子を崖から落とす、子が這い上がるなどをして、喜び合う親子を演じる内に何かに取りつかれたようにその場を去っていく。そこに、浄土宗の僧、遍念と法華宗の僧、蓮念がやって来る。お互いに良い同行者ができたと喜ぶが、宗派が違うことを知ると、お互い自分の宗派の方が優れていることを主張し、張り合う。遍念は鉦を、蓮念は太鼓を叩いて獅子を追い払おうとする。そうしているうちに辺りは揺れ始め、二人の僧は逃げていく。その後、そこに親獅子と子獅子が現れ、毛を振り乱しながら戯れるのであった。

この演目の見どころは、やはり「毛振り」と呼ばれる、親子獅子の精が長いたてがみを振り回したり叩きついたりするシーンである。親獅子は白、子獅子は赤いたてがみを、円を描くように大きく振り回す「巴」は特に躍動感があり、印象的であった。演じている歌舞伎役者の方お二人は実際の親子ということもあり、その一糸乱れぬ毛振りは正に親子獅子の情愛を感じるものであった。

今回歌舞伎を鑑賞し、音や動きなどの一つ一つに惹きつけられた。また、歌舞伎に抱いていた堅く難しいという印象も一変し、初めて鑑賞したが身構えずに楽しむことができた。古典芸能に触れる良い機会となるので、敬遠せずに歌舞伎鑑賞教室に参加してほしいと思う。

(日文三年 上原 緩奈)